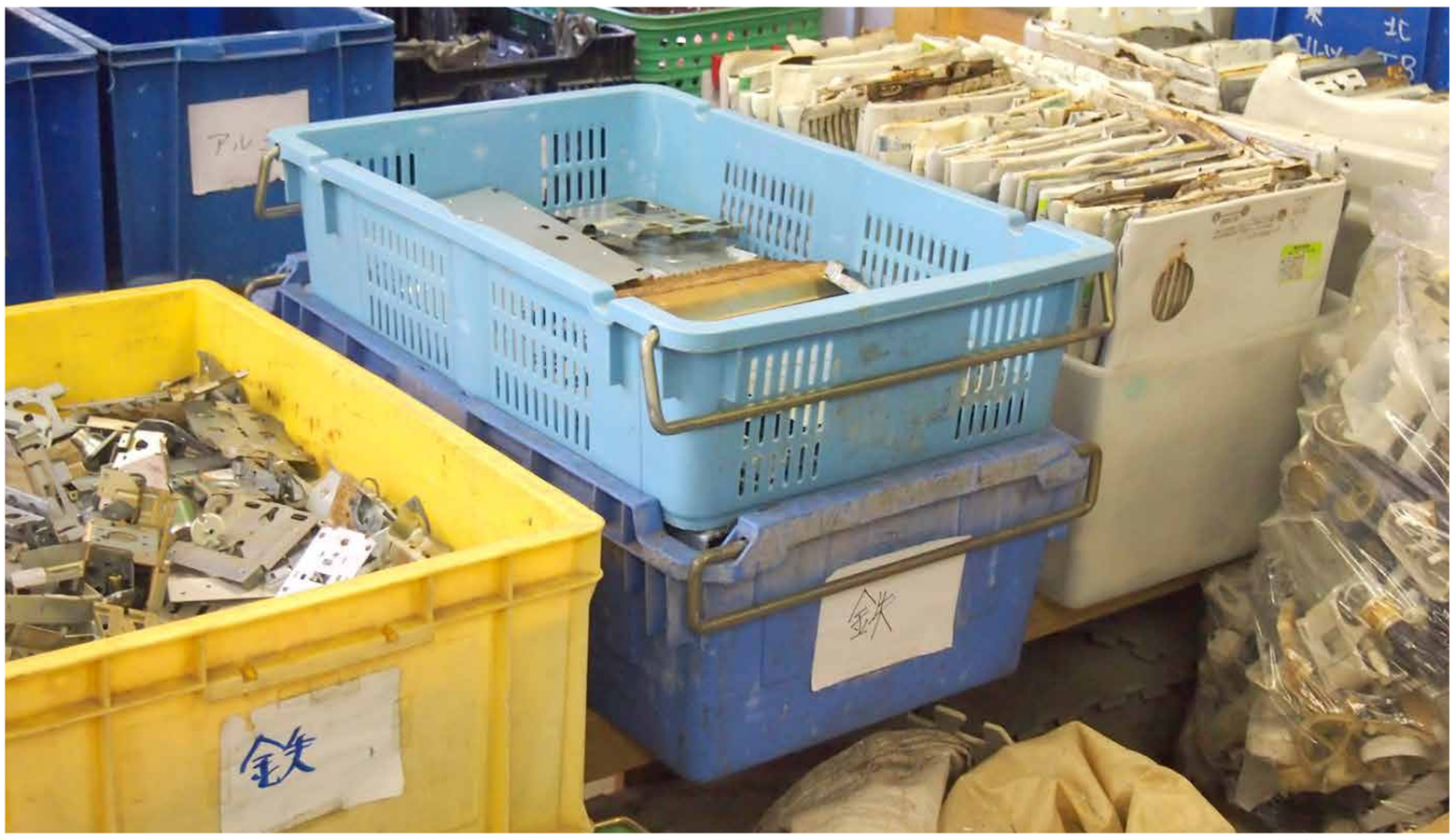
3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

非常時は、災害弱者が守られない世界。支援が必要だったことを知ってほしい。

就労継続支援B型事業所　さくらんぼ

◎主任生活支援員（当時）：山崎雅博さん



― 回収部品 ―

― 部品解体作業の様子 ―

避難所　障害者の避難生活には配慮が必要と知ることが、次の支援につながる。

陸上自衛隊多賀城駐屯地に程近い場所に施設を構えていた「さくらんぼ」は、津波で大きな被害を受けました。幸い利用者さんと職員に犠牲者は出ず、さらに利用者さんは全員、自宅の被害を免れたので、早くに家族の元に戻ることができました。しかし施設職員だった山崎さんは、避難所で障害者が生活しづらい実情を目の当たりにします。例えば避難所のトイレでは、広いスペースが確保された仮設の多目的トイレが不足していたこと。周囲の人に迷惑をかけるからと、当事者や支援者は避難所に対して居辛さを感じてしまい、施設や車の中に避難していたこと。例えば車いすを介助する職員の手が足りない時はきっと「手伝って」と口にすれば、周囲にいる誰もが手伝ってくれるはずです。福祉の現場にあるそうした「戸惑い・ためらい」も、一般の方の理解や気づきにより、もっと共有できるのではと山崎さんは考えます。

事業再開　震災前の委託作業がすべてストップ。新たな事業で利用者さんの仕事を再開。

津波の被害を受け、同じ場所での再建が難しくなった「さくらんぼ」は、地震があった翌月から多賀城市老人福祉センターの一角を借りて事業を仮再開しました。その時困ったのは、震災前の仕事がすべてなくなってしまったことです。それまでは地元に拠点を構える企業から委託された清掃作業を行っていたのですが、それらの企業も同じく被災したため、すべての仕事がストップしてしまったのです。山崎さんは市内の被災した住宅や駐車場の清掃の仕事を見つけて、何とか作業を再開させました。また少しでも利用者さんの工賃につながればと、キーホルダーなどのものづくりを始めることにしました。するとその商品がヒットし、注文がたくさん舞い込むようになりました。現在も震災前の仕事は戻ってきていませんが、ものづくりのおかげで危機を乗り切り、現在まで事業を着実に成長させることができたのです。

成長　仕事があることの喜びを実感。仕事への責任感が増すなど、内面も成長。

利用者さんは、「さくらんぼ」の看板を同じ場所に立てることができないことにつらい思いをしたようです。しかし別の場所で事業が再開し、ものづくりが始まると、利用者さんはいきいきと作業に取り組むようになりました。仕事があるありがたさを、改めて感じていたのです。震災前の清掃作業の時は休みがちだった利用者さんも、ものづくりが始まり多くの注文が入るようになると、休まず作業に来るようになりました。震災を通して利用者さんは、仕事に対して責任感を持つ、という心の成長を得ることができました。

山崎さんはこれまでを振り返り「ようやくここまで取り戻した」と実感を込めていいます。これからも利用者さんの声を代弁し、伝えることで周囲とつながり、復興の一助にしたいと考えています。